

都市づくり

両分野共通

景観

現状と課題について

- ・ 景観政策の高さ規制によって、既存不適格のマンションもできたが、マンションの維持管理を進めていく事業も生まれている。

- ・ 京都ブランドについて、もう少し掘り下げた議論が必要。

- ・ 不動産業者が町家に付加価値をつけた、新しい事業モデルを出している。
- ・ 古都保存法によって、三山は守れたが、市街地に対する規制はなかったため、大きく変わってしまった。
- ・ みんなの心の中にある京都らしさのイメージと、現実の京都のまちの様子が乖離してしまっている。
- ・ 強みと追い風を推し進めた結果、現在の向かい風が生まれている。
- ・ 景観保全のため高さ制限を行うと税収減になるが、京都を魅力的にして人を多く集めるものになっているのか、現状と課題の整理の仕方に工夫が必要。
- ・ 市民を鼓舞する景観施策ができていなかったことが課題。
- ・ 市民アンケートでは、景観の保全再生に力を入れるべきだとする市民が80.4%みられるが、まちの風景とこの数字が全然合っておらず、当事者意識がない。景観というのが、我がまちのことではなくて、観光地、景勝地など京都の中でも特別なまちことであると市民がみているのではないか。

政策の基本方向について

- ・ 都市は重層性をもった都市構造を有している。レイヤー(層)を重ねたような都市構造を踏まえることが必要。
- ・ 土地利用と公共交通の将来像を市民に示すとともに、一緒に考えることが必要。
- ・ 今回の計画では、低成長時代、低投資時代の都市のあり方について、どのような土地利用を誘発していくのかビジョンを示すことが必要。
- ・ 公共建築のデザインだけでなく、その施設の運用や管理の仕組みについて、方向性を打ち出すべき。市民の共有財産として、総合的にファシリティマネジメントを進めることが必要。

- ・ 悩みを逆手にとった事業アイデアを出していくことが重要。
- ・ 京都ブランド、京都らしさをどのように残していくかということが重要。
- ・ 今後、京都は、日本の中でどのような位置を目指すのか、再確認することが必要。

- ・ 景観について、京都市民以外の方がどうあって欲しいか考え、国の中での位置付け、近畿圏の中での位置付けを再確認し、景観政策によって逸失した税収分を他のところから充填することも考えることが必要。
- ・ 環境問題が政治問題化して、国際的に議論すると、地域性に配慮しない環境技術が進展するよう思われる。環境グローバリズムといってもよいような力が働いている。京都では、景観と環境を調和させて進めようとしている中で、まずいことがおきる前にいろんな手をうっていかなければならない。計算しやすい、わかりやすい環境配慮が進んでいるが、それが直接京都のまちに入ってくると、環境と景観のせめぎあいが起こるのではないかと危惧している。
- ・ 景観の中にも保全と活力が必要。景観保全が、活性化と対立するのではなく、活性化につながるものであることが必要。

市民と行政の役割分担と共汗について

- ・ 土地利用と公共交通の将来像を市民に示すとともに、一緒に考えることが必要。(再掲)
- ・ 自治連など、実際の活動を進めている既存の活動団体を、力強く応援することが必要。

- ・ 住民の自発的な景観づくりの活動を進めていくことが必要。
- ・ 地域のまちづくりを支援し、地域のルールづくりを進めていくことが必要。

10年後に目指すべき姿について

- ・ 全ての地域ではないが、渋滞があっても公共交通が便利であったり、歩いて暮らせる構造をもった都市を目指した方が望ましい場合があり、その場合渋滞解消より公共交通分担率を指標とすることも考えられる。

分野別方針検討に当たっての視点

- ・ 京都のまちづくりを考えるうえで、関西、近畿といった広域的な視点や日本全体の中での京都、世界との交流といった視点からの検討も必要。
- ・ 時代認識、時代潮流が変わってきており、新たな価値観に基づき考えることが必要。

その他

- ・ 自治体の総合計画が進まなかった理由は、財力、組織力、公衆力がなかったため。
- ・ 公衆力を高めるには、広報が大切だが、財力がない中、教育の場と連携することが必要。